

能楽雑感（146）～半音について（剛吟）

半音について（剛吟）～能楽雑感（146）

素謡の世界で色々な方のお謡を数多く聴く機会を持ってきましたが、音程の取り方で間違いやすい、或いは習得が難しそうだなと思うのは、半音の取り方ではないでしょうか。（但し、ここで「半音」と言うのが、和音十二律の音階に一致するのかどうかは、確証した訳ではありません）

半音の捕まえ方の難しさについて言えば、これまでの経験から言わせて頂くと、剛吟で言えば上音でのオ（ア行のオ）。

「高砂」に例をとれば、初同の上歌の中での、「・・あひに相生の」とか、前クセの、「異国にも」など。

しかし、流友の皆様の中のかなりの高い比率で、「鶴亀」から謡を習い始めた方がおられることは間違いありません。

そして、「鶴亀」の中で、最初に遭遇するこの音が、上歌の中で「ゆきげた、めのうのはし」です。このところを、師匠の指導が十分かどうかにもよりますが、いい加減にやり過ぎしてしまうと、以後何年も、場合によっては何十年も音を捕まえられないままに過ごしてしまうことになります。

私の場合、最初の指導者の久也師匠から、「このオの音は、今覚えておかないといけない」と言われましたから、その後苦労することはありませんでしたが、人様が意外にこの音を取り違えているのを耳にするにつけ、初動の大切さを実感します。

もうひとつ、気が付いたことは、同じ鶴亀の上歌で「ほうらいさんも、よそならず」と二つ連続して、「オ」が続くときは、比較的音が採り易くて間違える人は少ないことです。

そこで、「オ」に悩んでいる人におすすめしているのは、「めのうのはし」とか、「・・あひに相生のの」のようにダブルで発声し、それを覚えたら二つ目の「オ」は発声しないで、頭の中で・・。これを繰り返すと比較的容易に身に（耳に？）つくのではないかと思います。

（柔吟の半音については次稿にて）

能楽雑感（147）～半音について（柔吟）

半音について（柔吟）～能楽雑感（147）

音程の取り方で間違えやすい、或いは習得が難しいのは、剛吟だけに限りません。これも半音の取り方の難しさに起因するところであると思っています。

但し、この場合、音律としての半音と言うよりは、感覚的若しくは半音意識ともいうべき音の変化ですが・・・

具体的に言えば、先ず、①上ウキ音から中ウキ音への下げでしょうか。この他、②下の中の取りかた、③崩し、など。

「熊野」に例をとれば、

- ① 「色めくはなごろも・・・(九丁表上歌)、
- ② 「今は亜興に候らへば。おんにとまを・・・(七丁表)、
- ③ 「涙ながらかきとどむ・・・(文の段の留め) など。

カヘテ中音も同類ではありますが、この音はかなり恣意的に、或いは主観的に操作しますので、取りあえずは対象外とします。

逆に、正規の音に持っていくべきところを、それよりも半音足りないところで着地してしまう、「届かない症候」が良くみられます。

男性の場合は、上げが足りない、女性の場合は下げが足りない傾向があります。

男女共通して着地が正しくないのは、上ウキ音から、中ウキに回し下げたあとの上音への戻し。これも、熊野を例にとると、ロンギの中で、「たらちねをまもりたまえや・・・」の「ち」であり、②「うちすぎぬ。ろくどうのつじとかや・・・」の「ろ」がそれに当たります。

尤も、こうしたことは、西洋音楽的な規律をあくまでも基本とする音楽法に依っての感想であって、和の声楽である謡においては、あまり問題視すべきことではないのかもしれない。

能楽雑感（162）～ 「入」について

「入」について～能楽雑感（162）

昨日は川能連の定期上演の会でした。ほぼ、皆さんの上演を聞いていましたが、気になったのは、「入」の謡いかた。この場合、クリの後の「入」りでなく、単独での「入」のようですが、剛吟、柔吟共に、いかにも素人っぽい謡が殆どでした。

節としての「入」には、二つのポイントがあります。

その一つは、「入」の次の、右下がりのゴマ音（発音）が無視されていること。

謡本の中で、ゴマが、右下がりか平らなのかを、いつも神経を使いながら謡って欲しいものです。

もう一つは「入」自体の謡い方、言い換えれば長さ。

総じて、拍子合の謡なのに、素人は冗長な謡をします。

例えて言えば、拍子不合の「入」は、長刀、クセやロンギの平ノリの場合は脇差、そして、修羅ノリのような、拍子刻みをきちんと謡うべき時は、匕首（あいくち）でなくてはならないと思っているのですが・・・。